The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>中西徹著「うだつその発生と終焉」二瓶社,1990年,227頁
Author(s)	前, 久夫
Citation	デザイン理論. 1990, 29, p. 110-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52627
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書　評

中西　徹　著

「うだつ　その発生と終焉」

二瓶社，1990年，227頁

本学会の委員である著者の中西徹氏については，改めて紹介するまでもない。ただ，京阪電鉄の常務取締役および京阪百貨店の専務取締役という現職からのみ，本著に接しられては，あるいは戸惑いを感じられる向きが，あるやも知れない。そこで多少蛇足を付け加えさせていただく。氏は旧制第三高等学校を経て，京都大学文学部で美術史を専攻された。卒業論文は「高山寺蔵“人物鳥獣画巻”」とうかがう。もっとも当論文を閲読する機会に恵まれていないが，厳正な文献的考証をふまえ，作品に則した実証的研究と推察する。いうまでもなくそれが，京都大学の伝統的な学風であるからである。卒業後，氏は美術史研究の専門職としての道こそ選ばれなかったが，ひきつづきその学究態度は，その後の諸論文や本学会をはじめとする諸学会の研究発表において示されてきた。本著『うだつ　その発生と終焉』も，その延長線上に在ることは，いうまでもない。また，学生時代からそのシャープな美的センスに加えて，抜群の絵画描写の巧みなことは定評があり，すぐれたアート企画や玄人はだしの作品を，われわれは眼にしてきている。このことは言を費やすまでもなく，本著の随所に挿入されたスケッチのかずかずをご覧いただければ，明白であろう。

本題に入ろう。本著の対象となった建築であるが，絵画・彫刻・工芸と並んで造形芸術の重要なジャンルでありながら，これまで美術史の側からとり挙げられることが，殆どなかったといってよい。一つには，わが国の大学では伝統的に建築史の教育と研究は，工学部の建築学科において行われてきたことにもよる。したがって，わが国の建築史研究者は殆ど建築畑の出身者であり，ほんらい美術史の一分科としての建築史が，独立したかたちをとってきている。このことはヨーロッパの学会では考えられないことであろう。また，建築が敬遠されてきたいま一つの要因は，建築の持っている構造物としての側面であろう。建築のかたちつまり様式は，かならず構造に支えられて成り立っているからである。構造の理解は，理数科的な素養を要求する。さらに構造面でわからないということは，建築特有のことば（術語）がわざわいしているようである。建築の場合，語義が多岐にわたることがしばしばであ

り，またそのことば自身に歴史的な変遷がある。本著の主題である「うだつ」も，その例外ではない。その中にあって，この問題に取り組まれた著者に，先ず敬意を表しておきたい。と同時に建築史家の端くれとして，自己の怠慢はさておき，いささかジェラシーを感じないわけではない。

「ウダツが上がらぬ」または「ウダツが上る」などという諺は，われわれはときどき耳にするし，ときには口にもする。だがそのウダツとは何かと，改めて問われると返答に困ってしまう。また，なんとなく判ったようなフリをしていても，その実，自信のないとまどいがまとわりついている。さらに「ウダツ」なのか「ウダチ」なのかも判然としない。また語義のみならず，かたちの上でも二通りがある。すなわち妻（建築の側面）側の梁の上に立てて棟木を受ける（支える）短かい柱，つまり棟束をいう場合（梲・楹などと書く）と，妻の小屋を屋根より高く突き上げて小屋根をつけたものを指す場合（卯建・卯立などと書く）とがあるからである。いうなれば一方は建築部材であり，他方は建築構造体である。ところでの両者の関連については，建築史の上でもいまだに定説があるわけではない。本著にも二，三の説が紹介されているが，とくに深く言及されてはいない。むしろ本著は語義の後者つまり建築構造体としてのウダツの研究である。

いずれにしても，これまであまりとり挙げられることのなかった主題である。本著にも引用されているが，建築史の側からも，二，三の論考があったに過ぎない。もちろん纏った単行本は皆無であった。

本著の紹介に移ろう。本著の構成は「あとがき」にもあるように「ウダツの分布，あるいは横への広がりを緯糸に，ウダツの歴史，あるいは縦への流れを径糸として編上げ」られている。今すこし具体的に述べるならば，ウダツを求めての著者の探訪ないしは見聞紀行（スケッチ紀行も兼ねた）記（第１章　ウダツのある風景・第８章　現存するウダツ）と，絵巻物を中心とした絵画資料によるウダツの「発生と終焉」に関する研究（第５章　洛中洛外図屏風の世界 ― ウダツの発生と展開・第６章　名所図会の世界 ― ウダツの浸透・第７章　ウダツの終焉）と大きくは二つに分けられ，それにウダツの語義を言及した「第２章　ウダツとは何か ― 語義を中心として」と「ウダツの起源を知るための前提として，都市の成立や市民の発生ひいては町屋の発生についての検討が加えられている（第３章　都市の誕生・第４章　絵巻物の世界 ― 町屋の発生）。

このように絵巻物を資料とする具体的かつ実証的な手順と，広汎な文献資料（関連論文を含めて）の収集とその分析による研究態度は，冒頭にもふれたように京都大学の学風を受けつがれているものといえよう。このことが，本著をして単なる読みものとしてではなく，建築史を含めた美術史の研究書としての存在となっているのである。

つぎに本著の内容についてであるが，要するに購読していただくのが最良である。また懇

切丁寧な内容紹介は，かえって読者を疎読に終わらせかねない。そこで大筋だけを述べておこう。さきにもふれたように本著は，ウダツ探訪による実証的研究と，絵巻物を中心としたウダツの歴史的研究である。そして前者の結果としてウダツの分布は「京都を中心として，中山道沿いが最も濃密で，大津・草津・近江八幡・彦根・大垣・岐阜・美濃太田・美濃関・美濃市・下久手・中津川・落合・妻籠・和田・長久保と伸びて」おり，「つぎに密度の濃いのが北陸路で，大津・高島・今津・今庄・武生・鯖江・高岡と伸び」また「山陰道には和田山・八鹿・村岡・豊岡・出石・舞鶴・宮津などにみられ」「また東海道に沿って，栗東（六地蔵）・松坂・津島・名古屋・有松・岡崎にも見ることができ」，そして大阪・堺・奈良および南海道・山陽道にはほとんど見当たらず，また四国・九州にも見当らないことを指摘されている。なお関東や東北地方にも極めてわずかにみられ，その北限は盛岡であることをつきとめられている。以上の結果をふまえて著者は「ウダツは京都文化圏の目印か」と示唆される。その一例として北限の盛岡のウダツは，いわゆる「近江商人団」による伝播であることを，資料から明らかにされている。もっとも，つぎに述べる絵画資料たとえば近世の都市図屏風によれば，北は松島・塩釜から南は九州延岡まで，ほとんどの主要都市にかつてウダツが分布していたことが知られるとされる。そしてこの現象を著者は，京都文化が全国津々浦々にまで拡がっていたことを意味し，それがのちに京都以外に江戸・大阪などの文化の拠点都市の台頭で，京都文化圏が縮小されたためと思考される。このように，20年に及ぶ著者のたゆみないウダツ分布の踏査をふまえた指摘は，かつて建築史家はもちろん，他の民俗あるいは人文地理学の研究者たちの果たしえなかった未踏の開拓といって，過言ではない。

つぎに絵画資料によるウダツの発生と終焉についてである。著者はウダツが歴史資料（具体的なかたちとして）の中に初見されるのは，「今のところ」室町末期の「町田家旧蔵本洛外図屏風」であるとし，ついで上杉家・舟木家旧蔵・池田家旧蔵の各本図屏風や，祇園祭や住吉祭などの祭礼図屏風，さらには諸都市図屏風や名所図屏風・名所図会などなどによって，その後のウダツの展開を克明に追跡されている。そして名所図会の「有馬山温泉小鑑」（貞享2年　1865）から，「都名所図会（安永9年　1780）まで約100年間ウダツが急速に消えていったことをつきとめている。そしてその原因を著者は，この空白期間に起きた京都・大阪・江戸の大火にあると考える。つまり「ウダツは屋上での消化活動の邪魔になるだけで，費用がかさばるわりに防火に役立たなかった」ことに求める。そしてさらに著者は時代の変化をも指摘される。すなわち「ウダツが誕生した近世初頭は，市民が自信を持ち，自主・独立・自治の精神を信條に生き，希望にみちた時代」いわゆる「市民の時代」そして「町衆」の時代であった。その彼等がその精神のシンボルとして高々と上げたのがウダツであったとする。それが幕藩体制によって，すっかり制圧され「17世紀中頃から，自らの意志に反して『町人』どもと呼び捨てられるようになり，ついに「町衆であった市民が自らの手で獲得

した市民権を，軍事政権により剝奪されたように，ウダツも自らの手で消え去ってしまった」と，その終焉を意味づけている。

ほんらい書評というのは，著書の是非を論評するのが立て前である。安易な賞賛にのみ終始すべきではないことはもちろんである。ただ本著の場合，二，三のケアレス・ミス的な誤植は別として，非とするところはもとより，特に付け加えるべき事項も見出し得なかった。なお，「ウダツは突然，現れました」に始まる平易な口語体の文章も，読者をして抵抗なく研究書の世界に引き入れてくれることを付記しておく。最後に評者の個人的な希望として，おそらく膨大な点数になるであろう，貴重なスケッチを，本著の姉妹書として刊行されるよう，お願いしたい。

（前　久夫　大阪工業大学）